

んじがきやとひとりごちて、とのゐさうぞくまかへてめしあれば參給ひぬ、とあり、此文にてよくまらるゝにこそ、

〔源氏物語^十〕としかへりぬれど、世中いまめかしきことなくしづかなり、大將殿はものうくてこもりゐたまへり、ちもくのころなど、院の御時をばさらにもいはずとしごろおとるけぢめなく、みかどのわたり、ところなくたちこみたりし馬車うすらぎて、とのゐものゝふくろおさくみえず、またしきけいしばかり、ことにいそぐことなげにてあるをみ給にも、いまよりはかくこそはと思ひやられて、ものすさまじくなん、

〔倭訓栞^{前編 十一}〕まきたへ 敷栲、敷妙、敷細布、布栲など万葉集にかけり、或は色妙とも書るをもて、六帖にいろたへのこと誤る歌あり、又敷白とも書り、たへは絹布の名也、まきたへの衣はよるの衣をいふ、よて袖とも、床とも、宅とも、黒髪とも、枕ともつゞけり、令にいふ敷和衣も是成べし、

〔冠辭考^四〕まきたへの まくら 衣の袖 たもと

萬葉卷二に、人麻呂敷妙乃衣袖者、通而沾奴上に夜床、また人麿吾宿之、敷妙之妹之手本乎、隔て袂につゝ卷十一に、敷栲衣手離而、玉藻成麿可宿濫和乎待難、また敷細之衣手可禮、天卷十七に、之伎多倍能、蘇泥可幣之都追宿夜於知受云々、こは夜の衣袖に冠らせたり、中さて敷細布とて、専ら寢衣の類に冠らしむる事は古事記に、牟斯夫須麻爾古夜賀斯多爾多久夫須麻爾佐夜具賀斯多爾阿和、田伎能和加夜流牟泥乎云々、万葉にも、烝被、古事記に、是をあつなごやが下にねたれどもといへり、然れば夜の物は、なごやかに身にまきたしきを用る故に、和らかなる服てふ意にて、敷栲の夜の衣といふより、袖枕床ともつゞくる也、既に朱良引敷たへの子の下に引る如く、神祇令の集解に、敷和者宇都波多也とへいる敷は、絹布の織めのしげき意、和はなごやかなるいひなれば、美織也といへるをもおもへ、敷とは下に敷かたくなし、